

# 「小さな親切」運動静岡県本部賞

## 優太くんの 青いかさ

浜松市立都田南小学校 三年

松野 二久



その日の朝、お母さんが「かさを持って行きなさい」と言っ  
た。その時はピカピカに晴れていたから、かさがひつようだと  
思わなかった。だからだからぼくは、知らんぷりをしてかさを  
持たずに学校に行った。

午後のじゅぎょう中、雨がザアザア、遠くでかみなりがゴロ  
ゴロと鳴り始めた。ぼくは、学校のかさをかりるしかないと思っ  
た。

そのかさは、どれも古い。持ち主にわすれられ、ずっとわす

れられつづけたかさたちだからだ。中には、いいかさもあるけ  
れど、それは早い者がちなのだ。

けつきよく帰る時間になっても雨は止まず、ぼくは学校のか  
さをかりた。やっとかりられたかさは、茶色くなった古いビニ  
ルがさだった。

しょうこう口の外でかさを開いたら、すごい雨と「ブオー」っ  
という風で、かさのほねがいききに三本もおれた。いっしゅん  
でバキバキだ。

ぼくは仕方なく、ぬれながら歩いた。

道の中で、おいついて来た優太くんが、「入る？」と言って、かさに入れてくれた。優太くんは、ぼくがぬれないようにしてくれた。だけど、かわりに優太くんまでぬれてしまった。とにかくすごい雨で、本当はかさなんかでは、どうにもならなかったのかも知れない。

しばらく歩くと、お母さんが車でむかえに来てくれた。ぼくはすぐに車に乗った。お母さんが優太くん「乗って!!」と言った。けれどその時には、もう優太くんは家にむかって走りだしてしまっていた。雨と、かみなりの音で声が聞こえなかったのかも知れない。

ぼくは優太くんを車に乗せてあげたかった。今考えると、ぼくが乗る前に「乗って!!」って言えばよかったと思う。朝、お母さんの言う通りかさを持って行けば、優太くんにめいわくをかけるはずだ。いや、やっぱり本当はかさなんかではどうにもならない雨だったかな。

優太くんと、いっしょに頭からびしょぬれになって思った事は、口びるが青くなるぐらいさむかったけれど、ぼくの心はあったかかったんだ。優太くん!!かさに入れてくれてありがとう。いっしょに歩いてくれて、ありがとう。それからごめんね。

こんどはぜったい先に乗せてあげるからね。

